

日本語母語話者と韓国人日本語学習者における 複合動詞「～出す」と名詞の共起性の産出傾向

－複合動詞データベースに基づいて－

姜 銀 貞

本研究では、複合動詞「～出す」と名詞の共起性の産出傾向を日本語母語話者の複合動詞データベースと韓国人上級学習者の産出文から比較した。その結果、共起名詞の違いが学習者の産出した複合動詞の「～出す」の自然度を下げていることが明らかになった。学習者は母語話者のようにプロトタイプと周延的な意味を1つの語彙として統一的に把握しながら、関連語彙を増やしていくことができず、名詞の共起性判断にゆれがあることが示唆された。その原因としては、学習者が最初に獲得している共起語に偏りがみられることや、名詞とV1との強固な結びつきが他の名詞との結びつきを妨げることなどが推察された。

【キーワード】複合動詞, 「～出す」, 名詞との共起性, プロトタイプ, 産出文

1. はじめに

日本語学習者の産出した文には日本語母語話者なら用いないような語と語の組み合わせがあるため、不自然になってしまうことがしばしばある。語と語の組み合わせは、コロケーションと呼ばれることがあるが、一般的にコロケーションは「2つ以上の語が統語的に結びついた表現」のことを指している。しかし、コロケーションの定義は研究者によってそれぞれ異なった判定基準が用いられ、その規定は多様であり、明確な定義がないため、本研究では「共起性」と呼ぶことにする。ここでいう共起性とは、文における名詞と複合動詞の結びつきやすさの指標である。

姜(2014)では、韓国人上級学習者における複合動詞「～出す」の文産出について調査した。日本語母語話者の受容度判定の結果、学習者の産出文の受容度が低かった理由の一つとして、名詞(格要素)との共起性の問題が報告されている。例えば、姜(2014)の調査対象者である韓国人上級学習者の産出文では「送り出す」の場合、「年賀状を送り出す、メールを送り出す」という表現が用いられていた。また「打ち出す」では「ボールを打ち出す」といった表現が多く見られた。文法的には正しいが母語話者には不自然であると判断され、それぞれ「人材を世に送り出す」や「方針を打ち出す、政策を打ち出す」という名詞と複合動詞「～出す」の組み合わせに訂正された。このように母語話者と学習者の共起表現には差が見られ、上級レベルになっても複合動詞の文の産出において複合動詞「～出す」と名詞との共起性にズレが生じていることが窺える。

そこで本稿は、日本語母語話者と韓国人日本語学習者における複合動詞「～出す」と名詞との共起性の産出傾向を比較する。客観性を確保するため、Web から半自動的に構築

した日本語母語話者の国立国語研究所「複合動詞用例データベース¹」(以降、用例 DB)を用い、学習者の産出文との産出傾向を比較し、学習者の複合動詞「～出す」の名詞共起性の特徴を検討する。

2. 先行研究

日本語の語彙習得について、堀場他(2006)は、L2 学習者の語彙知識は母語話者のそれと比べて、量・質的に異なると述べた。さらに L2 学習者は共起語や連語関係に関する知識は習得が比較的遅いと共起語などの習得の困難さを示唆した。杉浦(2001)は、日本語学習者の作文とそれを日本語母語話者が自然な日本語に書き換えた作文からなるパラレルコーパスを用いて、母語話者と学習者の共起表現を比較した。その結果、母語話者による共起表現が多いことや学習者には固有の表現があることを明らかにしている。曹・仁科(2006)は、中級程度の中国人日本語学習者の作文データから、形容詞及び形容動詞を含む共起表現の習得状況及び問題点を解明した。共起表現の習得について、共起表現の習得は語との意味、形態的な組み合わせのどちらにも関連し、学習者が言語を運用する上で重要な役割を担っていると指摘した。

一方、複合動詞に関する研究については、これまでの複合動詞に関する研究は、前項動詞と後項動詞の組み合わせ(松本 1998)、語彙的複合動詞と統語的複合動詞²の区別(影山 1993)、複合動詞の意味分類(姫野 1999)が中心であった。日本語学習者の習得研究についてもそれらの研究を踏まえ、語彙習得を中心としたもの(松田 2000, 白 2007 等)が多数見られる。

寺田(2001)は、複合動詞の種類による習得の差について、語彙的複合動詞と統語的複合動詞のうち、どちらが日本人の帰国子女にとって習得しやすいかを検証した。その結果、一定の規則によって意味が理解できる統語的複合動詞は、規則さえ理解できれば新出語であっても解釈できるため、間違いがあまり見つからなかった。一方、頻度や類推によって mental lexicon³に記載される語彙的複合動詞は、一語としての性格が強く、その語に接した経験がなかったりインプットの量が少ないと習得が難しく習得に影響を与える要因であると述べている。松田(2002)は、超上級日本語学習者を対象に語彙的複合動詞「～こむ」の習得困難点について検討した。その結果、産出された誤用の多くは「～こむ」が単純動詞に強意を添えるという用法の類推から「V1+V2」の組み合わせといった方略を作り上げ、その方略を過剰に適用している過剰般化が推測された。陳(2004)は、「～あう」「～こむ」を取り上げ、中国人日本語学習者に文の受容テストを行い、学習者の理解困難点を探った。その結果、「V1+V2 のプロトタイプの語義」が習得されやすいことが示唆された。姜(2014)では、複合動詞「～出す」の意味習得に焦点を当て、産出の観点からその習得状況や文産出に影響を与える要因について調べた。学習語彙として選定された 37 語⁴を用い、学習者から得られた産出文の自然さを見るため日本語母語話者 3 名から受容度判定をもらい分析した。その結果、高受容項目 10 語、低受容項目 27 語であった。低受容項目 27 語の非受容文に影響を及ぼすと考えられる要因として、次の 3 点が挙げられている。学習者の大半には複合動詞「～出す」が派生的な意味を持つ語の産出について、V1 と「出す」の結合を過剰に用いる傾向が見られた。また、V1 と V2 の意味を韓国語の対応

表現にそのまま訳す母語訳に頼る傾向が示唆された。最後に、日本語と韓国語の共起表現に関する問題として「ヲ」格を取る「～出す」が格の前の共起名詞により、母語話者と学習者の「～出す」の産出文の意味知識に差が見られたと報告している。

これら一連の研究は語彙レベルの習得研究として日本語教育に有効な研究である。しかし複合動詞の運用という観点からすると、複合動詞が実際にどのような名詞と共起して使用されるのか、学習者の共起性判断についての研究が必要となってくる。しかしながら、学習者の共起性判断を取り上げた論文は今のところ少ない現状である。しかも複合動詞と名詞との共起性について取り扱った研究は管見の限りまだない。さらに、複合動詞の文の産出においては、文法的な正しさと共に、どの程度日本語らしい自然な文に近いかを判断する受容性もいっそう重要となり、日本語学習者だけでなく、日本語母語話者の使用傾向についても把握しておく必要がある。しかし、日本語の自然さの何を持って自然であるかという判断が難しくなるが、本稿ではプロトタイプ理論を援用し論を進める。

2.1 プロトタイプ理論

プロトタイプ理論は言語学、認知心理学上の理論であり、認知心理学者 Rosch によって提唱されたものである。人間が実際に持つカテゴリーは、必要十分条件によって規定される古典的カテゴリーではなく、典型事例とそれとの類似性によって特徴づけられるという考え方であり、今やその援用は多岐にわたる。

山梨 (2001) は、プロトタイプの典型的な事例は周縁的、非典型的な事例に比べて実際の伝達の場において使用頻度が高く、理解と記憶の視点からみて情報処理が容易であり、言語主体にとって比較的初期の段階から習得が可能な事例であると記述している。松田 (2000) は、動詞の典型的な事例はその動詞で表される用例を通して経験され、用例を通してその動詞に対する典型概念(=プロトタイプ)が内在化されると指摘している。

本研究では、「典型化」(=プロトタイプ)に注目し、日本語母語話者の用例 DB を用い、母語話者が複合動詞「～出す」に対して持っているプロトタイプはどのようなものであるかについて共起性の観点から検討し、母語話者と韓国人学習者の複合動詞「～出す」と名詞との共起性の産出傾向を比較する。

3. 研究目的

本研究では、日本語母語話者と日本語学習者における複合動詞「～出す」と名詞の共起語の産出傾向を比較し、複合動詞「～出す」と名詞との共起性の特徴を検討する。複合動詞の名詞との共起性の違いを検討することにより、日本語教育において、より自然な複合動詞の使い方を支援するための知見を得ることを目的とする。

4. 研究課題

本研究では以下の点について検討する。

- 1) 日本語母語話者と韓国人上級学習者が複合動詞「～出す」を使って文を産出する際に複合動詞「～出す」と名詞との共起性に相違点は見られるか。
- 2) 複合動詞「～出す」と名詞との共起性について母語話者と韓国人上級学習者とで相違点が見られるならば、その要因は何か。

5. 調査概要

本研究では、姜(2014)⁵の結果をもとに、学習者の産出文に対する日本語母語話者の受容度の判定基準が低かった低受容項目 8 語を分析対象語とし、日本語母語話者と韓国入級学習者の複合動詞「～出す」と名詞の共起性の使用傾向を分析する。

5.1 分析データ

5.1.1 母語話者データ

日本人母語話者の実験データとして、用例 DB を用いる。用例 DB には、3362 語の複合動詞が収録されており、複合動詞「～出す」は 148 語を収録している。この用例 DB を用いれば、分析対象の複合動詞の用例や格要素、例えば「送り出す」のヲ格にどのような名詞を取るか、を検索できる。コーパス構築の際は、検索エンジンに収集対象語とランダムなキーワードを与え、特定のサイトへの偏りを防いでいる。また、Web 特有の過度の引用に対応するため、完全に同一の用例は重複登録しないようにしている。それゆえ、用例 DB を用いることは母語話者の共起語のプロトタイプはどのようなものであるかを探るには妥当であると考えられる。

日野(2002)は、動詞「出す」は「ある領域にあるものをその領域外へ移す動作」を表し、ある対象を目的語として対格「を」を取り、その対象を内から外へ移すので、「出す」は他動詞である。複合動詞「～出す」も他動詞的に使われると述べている。本研究では、日野の考えをしたがい、「ヲ」格は複合動詞「～出す」の意味を表す最も大きな要因であると認め「ヲ格」に共起する名詞のみを対象に分析を行う。

5.1.2 日本語学習者データ

姜(2014)において韓国入級学習者の習得状況は、母語話者の判定により受容文⁶として判定された項目(以下、高受容項目)は 10 語、受容文として認められなかった項目(以下、低受容項目)は 27 語であった。低受容項目 27 語のうち、母語話者の受容度が最も低かった 8 項目に対する学習者の産出用例を、分析対象とする。分析対象の低受容 8 項目は、次の通りであり、受容度が最も低かった順である。

「締め出す、突き出す、切り出す、送り出す、ひねり出す、打ち出す、さらけ出す、洗い出す」

なお、学習者の産出文には母語話者の判定により、自然であると判定された文(以下、受容文)と文法的には正しいが母語話者なら使わないような、自然さとはかけ離れた不自然さをみせた文(以下、非受容文)に分けられているが、本稿では非受容文の産出用例のみ分析対象として扱う。

5.2 低受容 8 項目における複合動詞の意味分類

姫野(1999)は「～出す」の意義を「移動」「顕在化」「開始」の 3 つに大別している。まず、基本義として対象に物理的な力を加え、「外部への移動」の意を持つ「取り出す、飛び出す」などがある。それが転じて、対象の外部や表面に出現させ、人の目に触れさせる意味を表す「顕在化」には「思い出す、さらけ出す」などが入る。そして最後に、アスペクトとして動作・作用の「開始」の意を持つ「降り出す、泣き出す」などがこれに当たる。姫野(1999)は「移動」や「顕在化」を「語彙的複合動詞」、「開始」を「統語的複合動詞」として分けている。本研究では、一連の先行研究(寺村 2001 等)から統語的複合動詞より

語彙的複合動詞に対する困難さが指摘されていることから、語彙的複合動詞を分析対象に限定する。分析対象の 8 項目を姫野(1999)の意味分類に従いまとめたものを表 1 に示す。

表 1 低受容 8 項目の姫野(1999)による分類

外部への移動	顕在化
締め出す、突き出す 切り出す、送り出す	ひねり出す、打ち出す さらけ出す、洗い出す

6. 結果

6.1 課題 1：母語話者と韓国人上級学習者の「～出す」と名詞の共起性の相違点

本節では、用例 DB による日本語母語話者の複合動詞「～出す」の「ヲ格」要素情報の共起語と学習者の共起語を比較する。なお、用例 DB の共起語は、Web データの性質を考慮して用例及び格要素は出現頻度ではなく「出現ページ数」で計測されている。また、それぞれの母語話者の表には用例 DB の共起語を上位 5 位まで提示するが、その理由は、5 位と 6 位との間には出現ページ数に顕著な格差が見られたことや 6 位からは Web データならではの多様な共起語の広がりが見られたためである。

次の 6.1.1 では「外部への移動」の母語話者と学習者の名詞の共起性の対照について、6.1.2 では「顕在化」の母語話者と学習者の名詞の共起性の対照について述べる。

6.1.1 「外部への移動」の母語話者と学習者の名詞の共起性の対照

以下、表 2.1 と表 3.1 に示されている () 内の数字は、Web 上の出現ページ数を表し、百分率は出現ページ総数に対する百分率であり、筆者によるものである。なお、学習者の共起語には、受容文の共起情報や無回答文は取り上げておらず、非受容文の「ヲ格」要素情報の共起語のみ記載している。

分析対象 8 項目のうち、姫野(1999)の意味分類による「外部への移動」にあたる 4 項目の共起語について、表 2.1 に母語話者の共起語と表 2.2 に韓国人学習者の共起語を示し比較する。

表 2.1 「外部への移動」の母語話者の共起語 () 内の数字は、出現ページ数

複合動詞	総ページ数	ヲ格ページ数	共起語の上位 5 位					上位 5 位の総計
			1	2	3	4	5	
締め出す	1167p 100%	596p 51.07%	-者(83) 13.93%	人(50) 8.39%	車(27) 4.53%	客(25) 4.19%	業者(22) 3.69%	(207) 34.73%
突き出す	970p 100%	795p 81.96%	尻(154) 19.37%	腰(71) 8.93%	拳(43) 5.41%	胸(33) 4.15%	舌(31) 3.90%	(332) 41.76%
切り出す	1259p 100%	715p 56.79%	-話(159) 22.24%	別れ(76) 10.63%	離婚(53) 7.41%	別れ話(37) 5.17%	木(31) 4.34%	(356) 49.79%
送り出す	1289p 100%	665p 51.59%	血液(88) 13.23%	製品(59) 8.87%	人材(31) 4.66%	-生(31) 4.66%	-者(31) 4.66%	(240) 36.09%

表 2.2 「外部への移動」の韓国人上級学習者の共起語

複合動詞	共起語
締め出す	店, 戸
突き出す	紙, おかず, 記憶
切り出す	関係, 端, しっぽ, 油, 商品
送り出す	年賀状, お土産, メール

「外部への移動」は、主体あるいは対象が、ある容器あるいはそれに類似した現状の内部から外部へ出すことの意である。

「締め出す」は、母語話者の用例 DB のなかで、全体に 1167 ページ出現され、そのうち「ヲ」格が使われた用例は 596 ページである。共起語をみると、母語話者に最も多く使われた共起語は「喫煙者, 犯罪者, 侵入者」など「- 者」である。上位 5 位の中には「人」を表す共起語が多く占められ、母語話者による「締め出す」の名詞の共起性は「人」を表していることがわかる。さらにその対象者になる「人」は他人に悪い影響を与える者であると考えられる。それに対して、学習者は「店」や「戸」などが共起語として判断され、母語話者との違いが目立つ。「突き出す」は、用例 DB での全体ページ数は 970 ページ出現され、そのうち「ヲ」格の用例は 795 ページである。母語話者の共起語をみると、上位 5 位の共起語は体の一部分になっており、母語話者による「突き出す」の名詞の共起性は「尻, 腰, 拳」など、人体の一部であることがわかる。それに対し、学習者の名詞の共起語は「紙」や「おかず」「記憶」など、様々な場面での共起語が使われ、母語話者の共起性判断とは非常に離れている。「切り出す」は、全体 1259 ページ中「ヲ」格は 715 ページ出現されている。「切り出す」に対する母語話者の共起性は、何らかの理由で言い出しにくい「別れ話や離婚」に関する種類の名詞が主として含まれている。一方、学習者は「要らなくなったもの」などを表す名詞が共起語として使われている。最後に「送り出す」は、全体 1289 ページ中 665 ページが「ヲ」格である。母語話者の共起語は血液や製品, 人材, 卒業生など「何かの重要かつ大事であるものや人」が共起語として挙げられている。母語話者は「送り出す」の共起語として「もの」と「人」を同頻度で使用している反面、学習者は「年賀状やお土産」など、「もの」に限られていることが分かる。

6.1.2 「顕在化」の母語話者と学習者の名詞の共起性の対照

表 3.1 は、分析対象 8 項目のうち「顕在化」にあたる 4 項目の共起語について母語話者の共起語を示したものであり、表 3.2 は、学習者の共起語を表したものである。

表 3.1 「顕在化」の母語話者の共起語 ()内の数字は、出現ページ数

複合動詞	総ページ数	ヲ格ページ数	共起語の上位 5 位					上位 5 位の総計
			1	2	3	4	5	
ひねり出す	1147p 100%	670p 58.41%	アイデア (83)13.92%	時間(59) 8.80%	財源(37) 5.52%	金(35) 5.22%	ネタ(26) 3.88%	(224) 33.43%
打ち出す	1316p 100%	1233p 93.69%	方針(116) 9.41%	政策(88) 7.14%	策(73) 5.92%	-性(64) 5.19%	姿勢(57) 4.62%	(398) 32.28%
さらけ出す	985p 100%	760p 77.1%	自分(240) 31.58%	全て(51) 6.71%	-さ(35) 4.60%	すべて (33)4.34%	姿(30) 3.95%	(389) 51.18%
洗い出す	1305p 100%	969p 74.25%	-点(191) 19.71%	課題(90) 9.29%	無駄(62) 6.40%	リスク (47)4.85%	問題(39) 4.02%	(429) 44.27%

表 3.2 「顕在化」の韓国人上級学習者の共起語

複合動詞	非受容文の対象物
ひねり出す	様子、頭、首
打ち出す	ボール
さらけ出す	彼の秘密
洗い出す	罪、洗濯物、シャツ、血の跡、タイヤ

「顕在化」は、隠れていたり目に見えなかったりする対象が外部や人の目に見えるように出現する意味を表す。

「ひねり出す」は、母語話者の用例 DB のなかで、全体に 1147 ページ出現され、「ヲ」格の用例は 670 ページである。母語話者の共起語は「アイデアや時間、財源、金」といった「簡単におもてに出てこないもの」や「簡単に手に入らないもの」が共起語として多く挙げられている。一方、学習者の共起語には「様子、頭、首」などが使われている。「打ち出す」は、全体 1316 ページ中「ヲ」格は 1233 ページ出現され「方針や方策、政策」といった共起語が用いられている。それに対し、学習者は「ボール」を共起語として選択している。

「さらけ出す」は、全体 985 ページの中で「ヲ」格は 760 ページ現われた。「さらけ出す」は他人に見せたくないことや隠したいこと、言いたくないようなことなど、ありのままをうちあけることを表す。自分のことを他人に表出しようとしなない母語話者の特有の気質と関係があるようで、母語話者の共起語は「自分の隠したい何か」と関係がある共起語に限定されている。それに対して、学習者は「何かを隠したい」という共起語の「秘密」という共起語を使ってはいるが、「彼の秘密」となっており、他人の隠したいことが用いられている。「洗い出す」は、全体 1305 ページ中「ヲ」格の情報は 969 ページ出現された。母語話者は「問題点や課題」などの共起語が多く用いられている反面、学習者は「洗濯物や罪」といった共起語となっている。

6.2 課題 2：学習者における共起性判断の特徴

以下の表 4 と表 5 は、姜(2014)を踏まえて学習者の共起性判断についてまとめたものである。

6.2.1 学習者における「外部への移動」の共起性の特徴

表 4 は「外部への移動」に対する学習者の共起性である。

表 4 学習者の「外部への移動」の共起性

表 4 学習者の「外部への移動」の共起性			
締め出す	用法	共起語	店、戸
		動詞の意味	締める
突き出す	用法	共起語	紙、おかず、記憶
		動詞の意味	差し出す
切り出す	用法	共起語	関係、端、しっぽ、油、商品
		動詞の意味	切る、切り落とす
送り出す	用法	共起語	年賀状、お土産、メール
		動詞の意味	送る

「外部への移動」について、学習者の共起性は複合動詞の前項動詞(V1)の意味に頼っている共起語に集中していると思われる。「締め出す」「切り出す」「送り出す」に関しては、それぞれ「店、戸」「関係、しっぽ」「年賀状、メール」といった共起語から V1 の意味に頼って共起性判断をしていることが考えられる。「突き出す」は「ぐっと勢よく何かを前に出す」ということであるが、学習者には「前に出す」という「突き出す」の一面の意味に喚起されていると考えられる。

6.2.2 学習者における「顕在化」の共起性の特徴

表5は、「顕在化」に対する学習者の共起性である。

表5 学習者の「顕在化」の共起性

ひねり出す	用法	共起語	様子, 頭, 首
		動詞の意味	ひねる
打ち出す	用法	共起語	ボール
		動詞の意味	打つ
さらけ出す	用法	共起語	彼の秘密
		動詞の意味	暴露する
洗い出す	用法	共起語	罪, 洗濯物, シャツ, 血の跡, タイヤ
		動詞の意味	洗う

「顕在化」にも「外部への移動」と同様の傾向が見られた。「ひねり出す」「打ち出す」「洗い出す」にはそれぞれ「頭、首」「ボール」「洗濯物、シャツ」といった共起語が使われ、その共起性には V1 の意味に頼っていることが見られる。「さらけ出す」の意味には、自分のことを他人に隠したい何か、と関係がある共起語に限定される。学習者は何かを隠したいという意味として理解はしているものの、「彼の秘密」という共起語が使用されていることから、他人のことについては「さらけ出す」が使えないということまでは習得されていないと考えられる。このことから「さらけ出す」の持っている意味の一部分のみに喚起されていると教えられる。

7. 考察

本研究では、日本語母語話者と韓国人上級日本語学習者における複合動詞「～出す」と名詞との共起性という観点から、どのような産出傾向を持っているのかについて比較を通して検討した。その結果、両者の共起性について、母語話者は「外部への移動」の項目「締め出す、突き出す、切り出す、送り出す」それぞれの項目に対する共起性に一定のパターンが見られた。例えば「締め出す」の共起語は「人」、「突き出す」には「体の一部」、「切り出す」には「話」、「送り出す」には「ものや人」といったそれぞれのカテゴリーに分類された。また、「顕在化」の「ひねり出す、打ち出す、さらけ出す、洗い出す」には「打ち出す」のみ「策」といった共起語のカテゴリーに分類された。他の語の共起語には一律かつ統一性は見られなかったが、「ひねり出す」には「簡単におもてに出てこないもの」や「容易に手に入らないもの」など、「さらけ出す」には「自分にとって他人に隠し

たいもの」などに関連した種類の共起性パターンは見られた。一方、学習者には母語話者のような共起性パターンは見られなかった。

学習者の共起性の特徴について、学習者は「外部への移動」にも「顕在化」にも V1 の意味に喚起されているような共起語が使われており、V1 の意味に頼って共起性判断をすることや語の持つ意味の一部分のみに喚起されて共起性判断をすることが示唆された。

7.1 母語話者と韓国人上級学習者の共起性の相違点

母語話者は長い間、その言語に接した経験から自然に語彙の意味構造を習得し、プロトタイプと周縁的な意味を1つの語彙として統一的に把握しながら、関連語彙を増やしていく。それに対して学習者には、一語としての性格が強い語彙的複合動詞の持つ意味の間で典型度に差が生じ、母語話者のようなプロトタイプと周縁の意味との区別がついていない。例えば「締め出す」の母語話者のプロトタイプは「犯罪者や侵入者を締め出す」のような「人を締め出す」がプロトタイプ的である。つまり、他人に被害を与えたり悪い意味での影響を及ぼしたりする「もの」を示している。一方、学習者は「店や戸を締め出す」のような産出文から推測できるように「締める」に近い意味の共起語をプロトタイプとして認識していると教えられる。このことから、上級学習者でも V1 の基本的レベルのカテゴリーにとどまり、拡張へと進む抽象化された語の共起性には母語話者との違いが示唆された。

7.2 母語話者と韓国人上級学習者の名詞の共起性判断による相違点の原因

母語話者と学習者の複合動詞「～出す」と名詞との共起性判断に差がみられた原因には次の二つの原因が影響を及ぼしていると考えられる。

第一の原因として、学習者が獲得している共起語に偏りがみられることが挙げられる。一般的に日本語学習者は言語指導などによる限られた場面を通して意図的に語を学習していくことの影響を受け、幅広く多様な語彙を獲得し難い傾向にあるといえる。さらに、獲得された語彙そのものについても、母語話者のような意味の広がりがないことが窺える。このことから、産出において名詞との共起性が幅広く使用されにくくなったと推察される。

第二の原因として、特定の名詞と V1 の共起関係の固定化に関する影響が推察される。例えば「締め出す」の名詞の共起語として、母語話者には「人物」を表す共起語が使われているのに対して、学習者は「店」や「戸」などの共起語を使用する傾向がみられた。姜(2014)では「締め出す」のように限定された経験による習慣的な場面にはしか使わない傾向がある語については、共起する語が限定され、学習者は V1 の意味だけに頼る傾向が強いと報告されている。このように学習や経験の狭さから、初級段階に獲得された特定の名詞と V1 との強固な結びつきが上級レベルになっても他の名詞との結びつきを妨げ、母語話者のような使用へと広がっていかなかったという可能性が窺える。

8. まとめと今後の課題

本稿では、日本語母語話者と韓国人上級学習者における複合動詞「～出す」と名詞共起語の産出傾向を比較し、複合動詞「～出す」の名詞との共起性の違いについて検討した。その結果、学習者は母語話者のようにプロトタイプと周縁的な意味を1つの語彙として統一的に把握しながら、関連語彙との境界を認識することができず、名詞の共起性判断の違

いが示唆された。その原因としては、学習者が最初に獲得している共起語に偏りがみられることや、名詞と V1 との強固な結びつきが他の名詞との結びつきを妨げることなどが推察された。本研究の結果から考えられるのは、語彙的複合動詞に限っては、名詞共起語に制限があることや共起名詞の違いが学習者の産出した複合動詞「～出す」の自然度を下げていることが明らかになった。また、V1 の意味に頼る推測がきかないということが教育されておらず、複合動詞の指導法にも問題があると考えられる。より効果的な語彙習得のためには名詞共起語を含めて指導する方法が求められる。

今後は、本稿の結果を踏まえて語や表現に対する学習者の知識が曖昧であっても、文脈の中で意味をイメージし推測できる理解度調査を行い、学習者の名詞共起語の傾向を把握し、日本語教育においてより自然な複合動詞の運用を指導するための基礎的資料の提供を目指したい。

注

1)このデータベースは、<http://csd.ninjal.ac.jp/comp> で一般公開している。

複合動詞研究用の基礎データを提供することを目的として、Web データから機械的に構築したものである。収録語は、Web データにおける使用頻度に基づき、半自動的に決定している。データベースの機能は、複合動詞・構成動詞検索、格要素・用例一覧の表示、複合動詞と構成動詞との関係分析など、複合動詞とその構成動詞の関係や格要素の分析することに焦点を当てている。なお、本データベースは、国立国語研究所共同研究プロジェクト「文脈情報に基づく複合的言語要素の合成的意味記述に関する研究」の研究成果である。データベースには、3362 語の複合動詞、及びその構成動詞 1040 語を収録しており、それぞれの語には、格解析済みの用例が用意されている。なお、形態素解析は Juman(ver.60)、構文分析・格解析には、KNP(ver. 3.01)が用いられている。用例は、Baroni らの手法を応用して、Web から収集されている。具体的には、個々の動詞ごとに Web コーパスを構築し、そこから対象とする動詞の用例だけを抽出している。コーパス構築の際は、検索エンジンに収集対象語とランダムなキーワードを与え、特定のサイトへの偏りを防いでいる。また、Web 特有の過度の引用に対応するため、完全に同一の用例は重複登録しないようにしている。

2)影山(1993)は、複合動詞を「統語的複合動詞」と「語彙的複合動詞」に二分類している。統語的複合動詞は V1 と V2 の間に補文関係を取り「歌い終える」が「歌うことを終える」というような関係を持つ。一方、「語彙的複合動詞」はそのような関係が成り立たず、意味の習慣化や語彙化が進んだものであると述べている。

3)寺田(2001)では、人が一人一人持っている脳内辞書であるとし、例えば、日本語の母語話者であれば「き」と聞けば「木」「気」「記」などを思い浮かべることができる記憶や心の中にある辞書のことでありと述べている。

4)照山(2009)では、複合動詞「～出す」の日本語教育学習語彙として 37 語が選定されており、すべて語彙的複合動詞に限定されている。

37 語を姫野(1999)の意味分類に従いまとめたものを以下に示す。

姫野(1999)の意味分類による 37 語	
外部への移動	顕在化
飛び出す, 吹・噴き出す, 突き出す, 逃げ出す, 抜け出す, はみ出す, 追い出す, 送り出す, 連れ出す, 押し出す, 引き出す, 踏み出す, 投げ出す, ほうり出す, 吐き出す, 掘り出す, 差し出す, 閉・締め出す, 誘い出す, 呼び出す, 持ち出す, 取り出す, 切り出す, 貸し出す, 売り出す, 乗り出す (26 語)	張・貼り出す, 言い出す, 打ち出す, 思い出す, 見出す, さらけ出す, 作・創り出す, 生・産み出す, ひねり出す, 聞き出す, 洗い出す (11 語)

5)調査対象者は、都内の大学・大学院に在籍する韓国人上級学習者 12 名、全員が日本語能力試験 1 級を所持、日本語学習暦は平均年数 6.6 年、日本在留期間は平均年数 5.8 年。調査対象者に調査対象 37 語を提示し、複合動詞「～出す」を使って短文を作るように求めたうえ、37 語について既知語か未知語かを 4 段階で自己申告してもらった。学習者から得られた産出文の自然さを見るため大学院で日本語教育を専攻している日本語母語話者 3 名からの受容度判定で分析した。その結果、受容文として判定された項目(高受容項目)は 10 語、受容文として認められなかった項目(低受容項目)は 27 語であった。(詳細は、姜(2014)を参照)

6) 姜(2014)における受容文とは、その文が誤用であるかを判断する指標ではなく、その文がどの程度自然な文であるか、どの程度日本語らしい文に近いかと判断基準である。

参考文献

- 姜 銀貞(2014)「複合動詞『～出す』の習得—韓国人日本語学習者の文産出の運用について—」『言語教育・コミュニケーション研究』9, 77-91, 昭和女子大学大学院
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎, 由本陽子(1997)『語形成と概念構造』研究社
- 杉浦正利(2001)「コーパスを利用した日本語学習者と母語話者のコロケーション知識に関する調査」『コーパスに基づく日本語研究と日本語教育への応用を目指して』平成 12 年度名古屋大学教育研究改革・改善プロジェクト報告書 64-81.
- 曹紅笠・仁科喜久子(2006)「学習者の産出する形容詞共起表現に関する分析」『日本語教育方法研究会誌』Vol.12.1, 28-29, 日本語教育方法研究会
- 陳 曦(2004)「中国人学習者における複合動詞の習得に関する一考察—『～あう』と『～こむ』の理解に基づいて—」『ことばの科学』17, 59-80.
- 寺田裕子(2001)「日本語の二類の複合動詞の習得」『日本語教育』109, 20-29.
- 照山法元(2009)「日本語教育における複合動詞『- 出す』の学習語彙の選定」『早稲田日本

- 語研究』18, 24-35, 早稲田大学日本語学会
- 白 以然(2007)「韓国語母語話者の複合動詞『～出す』の習得—日本語母語話者と意味領域の比較を中心に—」『世界の日本語教育』17, 79-91.
- 日野資成(2002)「複合動詞『- 出す』の分類—統語論的・意味論的方法を使って」『日本研究』25, 135-147.
- 姫野昌子(1977)「複合動詞『～でる』と『～だす』」『日本語学校論集』4, 71-95, 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校
- 姫野昌子(1999)『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
- 堀場裕紀江・松本順子・鈴木秀明(2006)「日本語学習者の語彙知識の広さと深さ」『言語科学研究』12, 1-26.
- 松田文子(2000)「日本語学習者による語彙習得—差異化・一般化・典型化の観点から—」『世界の日本語教育』10, 73-89.
- 松田文子(2002)「日本語学習者による複合動詞『～こむ』の習得」『世界の日本語教育』12, 43-62.
- 松本曜(1998)「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114, 37-83.
- 山梨正明(2001)「ことばの科学の認知言語学のシナリオ」『認知言語学論考』ひつじ書房